

自動車整備・販売業を営むH社長は、倫理法人会に入会して数年経った頃、ある苦難に見舞われました。大手自動車メーカーに就職した、長男との関係の悪化です。

連休明けのある日、仕事に行くそぶりを見せない長男に対し、「連休は明けたけれど、まだしばらく休みをとっているのか？」と何気なく疑問をぶつけると、退職していたことが分かったのです。H夫妻に何の相談もなく、寝耳に水の出来事でした。

「いったい何をしているんだ！」と怒り心頭のH社長。そのまま長男を家から追い出してしまいました。

二カ月後、H社長の仕事中に長男が帰ってきました。顔はやつれ、目はうつろです。生気がなく覚束ない足取りで歩く長男に、H社長は絶句し、「今まで一体、どこで何をしていたのか」と、胸がかきむしられるような思いでした。すぐさま、二階にある長男の部屋へ向かい、仔細を聞こうとしましたが、長男からは一言の返事もありません。

一日、二日と時が経ち、(もうどうしたらよいか分からない)と思い悩んだH社長は、「倫理経営指導」を受けようと、長男とも親交がある、地元の講師をたずねました。

胸の内を講師に打ち明けると、「Hさん、お子さんはそんなに苦しんでいるのですね。でも、大丈夫ですよ」と励まされました。同時に、「これから言うことを、必ず実行できませうか」と問われたのです。

「息子のためなら何でもします」と答えたH社長は、長男に対する思いを正直に書き



苦難はより良い 家庭へと導く試金石

記した手紙を手渡し、講師から伝えられた実践を一息にやり遂げました。実践を終えたH社長は「後は天に任せよう」とすっきりとした心持ちになったといいます。

実践を通し、これからも長男の心に寄り添っていかうと考えていたある日のことです。仕事に向かおうと靴を履いていると、背後に階段を下る足音がしました。振り返ると、そこにはH社長の会社のユニフォームであるつなぎを着た息子がいました。そして「父さん、今日から仕事を手伝わせてください」と言ってきたのです。

長男との関わりを通して自身を見つめたH社長は、それまで息子を「自分の言うことに従っていけばよい」と押さえつけていたことを猛省し、周囲の人の支えに感謝するようになりました。現在、H社長は後継者である長男や大切な社員と共に、厳しい経済状況下でも新規事業を打ち出すなど、心一つにして業務に励んでいます。

『万人幸福の栞』には次の一節があります。「昔の人は天を父、地を母とよんだ。父母は、その子の求めには、何物をも惜しまず与える。与えられぬのは、ま心からこれを求めないからである」

長男との間に生じた苦難に、わき目もふらず実践に取り組んだH社長。この苦難は、自身の息子と向き合い、よりよい家庭を築く大きなきっかけとなりました。

苦難を、自らにとって本当に大切なことを磨きだす試金石と捉える時、向き合う勇氣が湧いてくるのではないのでしょうか。